「律法学者を非難する」　2023年11月01日

民衆が皆聞いているとき、イエスは弟子たちに言われた。「律法学者に注意しなさい。彼らは正装して歩きたがり、また、広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを好む。また、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このような者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」（ルカ20：45～47）

律法学者は、ファリサイ派の人々の中から更に修練を積んで、律法について専門的に学んだ人である。紀元前2世紀頃、シリアのアンティオコス四世エピファネスによってエルサレム神殿が崩壊させられ、ユダヤ教元来の罪の贖い・清めを中心とした神殿祭儀が行われない状態になった。ファリサイ派は、そのような時代の中から、モーセの十戒を基本にして律法体系を作り上げ、律法遵守によって、イスラエル人のアイデンティティを構築しようとして出発した会堂での礼拝を指導する宗教集団である。神殿で祭儀を執り行っていたサドカイ派は貴族的宗教集団であったのに対し、ファリサイ派は民衆に律法を説く立場にあったので、民衆の苦難を知り、死後の世界や復活の教理を取り入れた。彼らは律法を守ることによって、神からの義に与ると行いの功績を強調した。ファリサイとは「区別する者」という意味で、律法を守らない者と自らを区別し、高みに立った。

ファリサイ派は当初、民衆と共にあろうとしたが、主イエスの時代、民衆を宗教的に支配し、権威主義的になっていた。律法をかざし、守る者を「義」とし、守らない者を「罪人」と烙印し、ユダヤの共同体から排除する権力を振り回すような宗教集団に堕していた。民衆は、ファリサイ派の人々の教えによって自由が奪われ、差別による宗教管理体制下に置かれ、萎縮させられていた。宗教が権威、権力を手中にする時、その宗教は必ず、真の宗教的生命を失い、形骸化し堕落する。主イエスの時代、ファリサイ派は、そのような状態で、主イエスは彼らの偽善を批判し、激しく非難している。

まず「律法学者に注意しなさい」と言い、5つのことを非難している。①「彼らは正装して歩きたが」る。ラビ（宗教指導者）が着る衣をまとっていたが、それは、華やかに装飾されていた。主イエスは多忙な宣教活動で衣はほころび、埃まみれであっただろう。②「広場で挨拶されること」を望んだ。彼らは広場を威風堂々と闊歩し、民衆から尊敬を込めた挨拶を受けることを望んだ。③「会堂では上席、宴会では上座に座ることを好む。」人の集まる所に行けば、人々の視線が集まる上座に座ることを好んだ。④「やもめの家を食い物にし」た。夫を失った彼女たちは心細く、経済的にも恵まれていない。その彼女たちから、巧みな言葉で金品を出させる。⑤「見せかけの長い祈りをする。」彼らは長い祈りにより信仰深い態度を見せて、民衆からの賛辞を得ようとする。主イエスは、このようにファリサイ派の人々を非難し、彼らは「人一倍厳しい裁きを受けることになる」と言われた。神の言葉を説く者は、真っ先に、説いた言葉によって、自らが裁かれている。

主イエスのファリサイ派の人々への非難は厳しいものであるが、これが、当時の彼らの偽善であった。しかし、この非難の言葉は遠い昔のことではなく、現在の宗教者にも妥当する言葉ではないか。宗教者は人間を超えた絶対者を証し、この方との関りを説く者であるから、何よりへりくだる。権力を求めず、媚びない。自分の栄利を求めず、利他に生きようとする。主イエスは、偉くなりたい者は仕える者となり、頭になりたい者は僕になりなさいと言われ、人を生かすために、ご自身を十字架に献げられた。